

## 「生きていく」とは素晴らしきこと」

平成二十九年七月 兒玉 敏

これまで、生きることの大変なことはわかってはいるつもりでいましたが、他人に生き方を語ることでできるような人間が、世の中にいるのでしょうか。自分のことを振り返れど、後悔跡をたたく。自分で自分の生き方に納得できることなど、ほとんどありません。

私たちは「宿命」を持って生まれ、「運命」という大きな潮流に動かされていくと私は考えます。運命の最たるものは「人間」として、この地球上に生まれた」ということではないかと気づきました。

近代文明では、その出発点において明るい未来を想定していました。ですから近代人は「意思の自由」によって、人生を自由に切り開き、変革することができると考えた。つまり、たゆまぬ努力を続けさえすれば必ず自分の望む方向へ進むことができると考えたのです。しかし、実際には無制限に自由であるということはありません。

私たちは思うようにならないこの世界に生きています。自由意志や努力や希望など、時に大きな潮流に呑み込まれてしまう、そんな不条理な世界を懸命に「生きる」仲間なのです。私は、この「生きる」というところに人間の最大の意味を感じています。

つらいこと、悲しいことがあると、早くこのころの痛みをどうにかしたい、治したいと願ってしまいます。一刻も早くこの傷から逃げたい、晴れやかな幸せな気分になりたい、そう思ってしまうのは当然のこととは思いますが、本当にそれでいいのでしょうか。

東日本大震災、熊本地震、またこの度の北九州の豪雨にみまわれた人たちの心のケアする人たちを批判するつもりはありません。しかし、人のころというのは奥深く複雑なものです。

それをケアすることはただでさえ難しいことなのに、あのように未曾有の非常時です。通常ありえないような出来事に遭遇した人たちを前に、ほとんど経験したことのないケアする人達は大丈夫だろうか。ひとのころを癒すというときに、その傷ついた状態を「悪」と考えてしまい、「だから治さなければならぬ」という考えになってしまふのは間違いだということを理解できているのだろうか、不安に思ったのです。

本当の意味で、こころの傷や痛みは治ることはないと思うからです。治

らないけれども、その痛みと折り合いをつけて生きていく、その折り合いの付け方を工夫するほかない。こころの傷はそういうものではないでしょうか。ひとのこころが傷つくこと、それは善でも悪でもない。一つがあるがままの自然の状態なのです。あれだけのことが起こったのです。大切な人を亡くし、大切なものを失った。こころに傷を負うのは当然のことです。自分自身がそうしたことには直面したらと考えると果たして立ち直ることが出来るだろうかと考えると想像が付きません。人生まさに不条理です。今まで努力してきた人生を一瞬にして奪い去ってしまう「生きる」とは様々な「不条理」との戦いだと言ってもいいかもしれません。不条理とは、道理に合わないことを言いますが、私たちが最も不条理であると感ずるのは「死ぬこと」かもしれません。

私たちは、どんなに健康で強く生きていても必ず死ぬ。それだけは公平です。そして、人は生きて死ぬ生き物なのですから、最も大きな「道理」であると言えます。そう考えますと、「死ぬこと」が道理であるならば、死なないこと―生きることそのものが「不条理」、となるのかもしれませんが。

「幸せ」とは一体何か、と問われたらどう答えるでしょう。美味しいものを食べたい、勝負に勝つこと、それこそ人それぞれだと思いますが、確かに、そのどれもが「幸せ」の瞬間だと思います。もし、この「幸せ」がずっと続いたらどうでしょう。それを「幸せ」と感じられなくなり、もつと違った幸せが欲しくなるのではないのでしょうか。つまり、「幸せ」と「不幸せ」。プラス面とマイナス面の両面が人生だとわかります。その両面を行き来することこそ、生きるということなのではないのでしょうか。

こころの苦しみや悩みの多くは、人との付き合いの中で生じてきます。人間は社会をつくって生きていく生き物ですから、当然といえば当然です。人との付き合いは「淡く長く」がいちばんです。「人間は、最終的には一人である」。人間の縁というのは密着しすぎると、非常に難しいことになるのです。

夫婦もそうです。もともと、生まれも育ちも違う人間が一緒にいるわけです。

いくら長く一緒にいようともそれぞれよくわかっていないことがあっても当然なのに、いつの間にかわかってはいるはずだ。わかっていて当然だ、

となってしまうのです。肉親だから助け合うのは当たり前、そこに欲が出てきます。でも他人だと思えばそんな欲は出てきません。

「生きる目的は、果たして必要なのでしょうか？」人間は、自分で生きているつもりでも、自分だけで生きているのではないことに気づかされます。もちろん生きる目的や目標を持ち、何かを達成することは素晴らしいことだと思います。「人生の目的」というのはあまりにも大きなテーマで、そう簡単に見つかるものではない。一方、確実に見つかるのは「目標」です。

自分では気づかなくてもほとんどの人が目標をもっています。お金持ちになりたい。どこどこ のあれが食べたい。そんなことも細かな目標と言っているのかもしれない。しかし時間と共に薄れてきます。「目的」はいつまでたっても失うことはありません。

そこが目的と目標の違いでしょう。人生の目的を求め続ける、それこそが人生なのでしょう。今まで生きてきて果たして、生きていく目的、そういったものはないんじゃないかと思うようになりました。

「生きる」とは、それだけで奇蹟といってもいいのではないのでしょうか。個の人間として生きるために、気づかないところで大きなエネルギーを消費しながら、今日一日を生きている。そう考えると「生かされている自分」それだけで十分なのではないでしょうか。

私たちは生きているだけで価値がある存在です。生きるというだけです。に様々な闘い、懸命に自己を保ち、同時に自然と融合している、悩みのたうちながら、毎日を生き抜いている。そんな「いのち」の健気を思うと感動せざるを得ません。

人間とは、死ぬ時にはどんな人でも一人。本来孤独なものです。今、そうしたことをちゃんと認めたくえで「孤独な人間」同士の絆というものをつくらなくてはならないのかもしれない。

直接的にしる、間接的にしる、私たちは人々の間に生き、活動を続けています。その中で、自分が孤独であることを自分なりに認識し、しかもその孤独に耐える力を育てていくということが、今の私たちには大切なことなのです。

また、最近、ニュースや新聞を見ていて心が痛むのは、劣悪な環境下で真面目な若者が死を選んでしまうことです。東京五輪の国立競技場で働く

建設現場の若者が月の残業時間200時間を超える過労で命を絶ちました。

自分の価値が認められない世界。追い詰められた精神状態の中、桁外れの労働時間やノルマを課せられる。心身ともに痛めつけられ、暗闇しか見えなくなったのでしょうか。もっと多様な生き方、働き方がある、なぜそこから逃げなかったのでしょうか。他の世界を見てほしい気がします。真面目だからこそ追い詰められたのでしょうか？

自分に合う世界を探す方法だってあるのです。最もそうしたことに気づく余裕があったらそこには至らなかつたでしょう。むしろ労働させた方の責任が重大です。

人間世界が不条理で残酷なものであると頭で理解できても、現実的にはなかなか耐え切れないというのも真実でしょう。そうした中で、救いを与えてくれる存在として人々が欲したのが、神や仏といった「大いなる存在」です。例えば、突然病気になるってしまった、愛する人が死んでしまった。そんな不条理としか思えない出来事が起こってしまった時、それは不公平なことではなく、大いなる存在から与えられた使命や課題であると考えて納得することができたら、たしかに救われるでしょう。大いなる存在があると考えるだけで、励まされ、身体を動かせるようになることもあります。浄土真宗で言うなら大いなる存在、仏教で言う「他力」（仏さまの力）というものでもあったように思います。「他力」とは他人任せという意味ではありません。求める・求めないに関わらず、私たちが動かしてくれるものなのです。

私たちは、一人、自分の力で生きていくという覚悟をしなくてはなりません。どんなに信頼できる友人でも、ここから愛する人でも、あなたという「個」に寄り添うことはできても、一つの個になることはないのです。しかし、その絶対的孤独の中、ふと他力の風が吹くことがある。それは大いなる存在を感じさせる一瞬ともいえるかもしれません。

ときに人というのは、自分の力を超えた力を発揮できることもあります。自分自身が不思議に思うことがあったり、なぜかふと思いついて、行動を起こせたりすることがあります。そんな時、それは「他力」（仏さまの力）が働いたのではないかと思うのです。何故かというと今まで私が仏教を詳

しく勉強したことはありませんが、縁があつて浄土真宗という仏教の書物に触れることが多くそこから私がそれに反論できなく、むしろ理解が逆に深まることに気がついたからです。

また、私が四十二歳の時、心臓病で倒れ、死ということに直面し不思議な力を経験したから言えるのです。

経験した人ならわかるかもしれませんが。心臓病は何もわからなくなる瞬間は痛みと、苦しさ、心細さと、闇への恐怖で助けを求めようにも声すら出ません。動けなくどうすることもできません。まさに、もう駄目だと思つた瞬間、気を失いその後は麻酔にかかつたと同じです。

しばらくして（空白の時間、どれくらいかはわかりません）、……さつと光がさしてきました。ふつと気が付いて、私にとつての大いなる存在、仏教で言う「他力」（仏の力）というものであつたように思います。見ると病院の救急のベッドで脂汗をいっぱいかいた先生（医師）の姿が目の前、今まさに処置をしてもらつた先生の安堵した表情でした。

医師からよく助かつたと告げられ、（死んでも不思議ではないとも言われ）あれから生きることにについて考えるようになりました。

もちろん、医師の力（医学）によるものも非常に大きいのですが、私は小説家でもありませんからうまく表現できませんが、……そればかりか、いや、それだけでは片付けられない何かがあるような気がしてなりませんでした。

死をさまよつた自分自身に「そう簡単に死ぬな」ともう一人の自分が語り掛けるようなことがあつたように思います。それが「他力」なのでしょう。もちろん幼い子供や妻を残して逝くわけには、の気持ち（生きる責任）も当然頭の中に強くあつたように思います。

太平洋戦争を経験した世代は、特に感じられることがあるかもしれません。他人を押しつけ、われ先にとという人が生き延びた。親鸞は「人はみな悪を抱えて生きている」と、「人は誰もが悪人である」と言いましたが、自分自身が悪人なのです。

戦争は殺すか、殺されるかです。勝者は人を殺して勲章です。人間はなんと残酷な生き物なのでしょう。戦争でなかつたら人を殺せば殺人罪で死刑、まさに真逆です。

戦後七十年余りを過ぎようとしています。戦争ができる法案、また、憲法改正など歴史は繰り返されます。人間だれしも「自分さえよければ」という気持ちになりやすいのですが、自分は生かされているのだと考えたら「いのち」の大切さをもっと強く自覚して生きていくことが重要だと思います。

人間なんと身勝手な生き物なのでしょう。戦争とは悪そのものです。日本のように経済的に豊かな国は貧しい国の人たちの富を搾取しているかもしれません。私たちは生きている限り、悪を重ねて生きていくのです。しかも同時に善なるものも内包している。人間はそうした両極を内包しながら生きていくのだ、という意識のかけらは持つべきだと思います。